

# 記憶に残る私の仕事, そしてあの街

## 巨大事業の中での感性コミットとハイテク技術

—新宿アイランドの設計・発注・監理—

小畑 晴治



新宿アイランドが目指したコンセプトは、超高層ビル街での「人に優しい街づくり」「記憶に残る場所づくり」であった。住宅・都市整備公団内部関係者やコンサル・ゼネコン・部材メーカーの人の関係に恵まれ、担当課長としてなんとか役割を果たすことができた。1件600億円超の工事発注も、超高層オフィスビル街区の設計・発注も公団初であった。

西新宿のビル街で、ここだけは歩道や広場に面して水辺があり、手すりは1本もない。「事故が起きたら、申請者責任者の君が責任を取るんだよ」と守旧派に言われた。タクシーや酔っぱらいが水の中に落ちたことはあるが、子どもや老人が落ちる事故は幸いにも、これまでなかった。

工事金額も巨大な公共工事のため、1000円単位の間違い（6千万分の1）でも会計検査院が指摘する格好のネタにされるというので、その備えや対応にも腐心した。再開発事業自体のリスク管理や多様な権利者の不安感から追及される工事費の妥当性や低減努力の説明責任を果たしつつ、わが国初の本格的なパブリック・アートの導入も行った。（ファアレ立川と同時担当）太っ腹の上司だった木村光弘部長（当時、故人）が、「すべて君の判断でやってくれてよい」と任せてくれたため、当時の公団では不可能と考えられた多くの難題を関係者の信頼関係と相まって乗り越えることができたと感じている。

公団で未経験のカーテンウォールの導入に際しては、松村先生や清家剛先生にもアドバイスを頂き、米カプルス社のハニカムコア金属カーテンウォールを用いた。ハニカムコアの「接着剤」の耐候性リスクを指摘する関係者からは、ここでも「事故が起きたら、誰が責任を取るのか」との言葉が投げられた。

プロジェクト竣工後、アート除幕式には、モンデール駐日大使夫人、ウーブリュー仏大使夫妻、イタリア大使夫妻のご参加とご挨拶を頂くことができ盛大に行われた。



敷地：2.2ha  
延床：24万㎡  
竣工：平成7年